

カ プ ラ

**KAPLA**

**対象：3・4・5歳児**

**幼児フリー 岡元 咲千**

# 活動スケジュール

1回目	想像して何かを作ってみよう	7回目	組み合わせ方
2回目	少しレベルを上げる	8回目	海外の建物と照らし合わせる
3回目	みんなで協力する	9回目	ダイナミックに
4回目	作品を紹介する	10回目	少し違う形での復活
5回目	色付きカプラ新たな発想へ	11回目	アマチュアの街を
6回目	新しい作品の作り方		



## テーマの設定理由

今あるものに加え、新しいカプラをプレゼントしてもらったことから、そこから子どもたちのカプラに対する意欲が高まっているように感じたため、探求し、さらに面白い興味深い作品と一緒に作っていきたいと感じた。常に保育室に置くようになると子どもたちのカプラに対する興味感心、想像力、創造力、遊ぶ頻度などどのように変化していくのだろうと疑問に思ったため。

### 問いを考える

1人で作る時と数人で作る時に感じる面白さや楽しさの違いや、作品を作っていく中で出てきた発見や疑問を子どもと話し合う。



### 環境をデザインする

視覚的に誘われるよう、作品を写真に撮り掲載する。子どもたちが作った作品を「みんなのカプラの本」として、手作り本を作る。

### 探究活動を実践し、記録する

子どもたちの「作ってみたい」に耳を傾け、保育者も一緒に作品を作る。自分の力量の少し上を目指そうとする者、できないと投げってしまう者には、きっかけづくりや、手を貸す場面を作って様子を見ていく。

### 振り返り、共有する

午睡中や職員会議のミーティングの時間に、幼児クラス保育者で集まり活動内容を振り返り、他の保育者から意見やアドバイスをもらったりする。



## No.1 想像して何かを作ってみよう

「こんなもの作ってみたい！」など想像力を広げ、自分の作りたいものを作ってみようと挑戦する。



### 準備した素材や道具・環境設定

- ◎カプラ 椅子
- ◎広々とした空間

### 振り返る

カプラは積み上げることも楽しいが、船や宝箱のような立体的な物を想像しながら作ることも面白さがある。一人で遊ぶのではなく、他者と共に作ることも楽しさがあると、子どもたちは気づいていた。保育者も一緒になって作ることで、苦手意識がある子どもでも、「保育者と一緒なら作ってみよう」という気持ちになるのだろうと考えた。



### 活動の姿

いつも大切な空き缶を持っている男児。その空き缶を入れる「宝箱」を作る。

色付きカプラを使い、宝箱のきらきらを表現。

自分の好きなものをカプラで作り上げてみようと、想像しながらカプラを組み立てる。

「深海魚を見つけられる船」と、少し照れくさそうに報告。

「僕より大きいタワーを作るんだ！」 「先生よりも大きくするよ！」と、背比べをしながらカプラを積んでいく。保育者よりも高くなると、自信満々の表情でハイポーズ。

## No.2 少しレベルを上げる

カプラの図鑑を見ながら、どのような仕組みになっているのか真似しながら作り、仕組みを習得していく。

### ✓ 準備した素材や道具・環境設定

- ◎カプラ 椅子 カプラの見本書
- ◎広々とした空間

### 振り返る

難しいことに挑戦するのは良いが、自分のレベル以上のものを作ろうとすると、そこでまた苦戦する。自分は今どのくらいのもので作れるのか、知っていくことも大事なのではないかな。子ども同士で経験したことを伝え合い、カプラ遊びが他者へどんどん広がっていけば良いなと感じた。子どもが作るカプラは、芸術のようだ。



### 活動の姿

絵本にある壺を作ることに挑戦。まずは、保育者の手を借りながら一つひとつどこに置くのか、場所を確認しながら置いていく。

口が大きくなっていく仕組みはどうなっているのか気になる。絵本をじっくり見て「ずらして置く」ことに気が付く。だが、ずらして置く技はかなり難しく、集中モードに。

何度も崩れ、作り直してを繰り返してやっとの思いで作った二人。「本にあるやつは難しいけど、作れた！」とカプラを作ることに自信がついた様子。

## No.3 みんなで協力する

一人で作るだけではなく、他者と協力しながらカプラを楽しむ。



### 準備した素材や道具・環境設定

- ◎カプラ 椅子
- ◎広々とした空間



### 活動の姿

今までは一人で取り組んでいたが、これまでの経験したことを他児にも教えてあげたいと、友達を誘う。「こうやって持ったら持ちやすいよ。」と経験したものが率先して教えてあげる姿が見られた。

完成すると、作ったもの同士で「やった！これ一人では作れなかったよ。」と喜び合う。ここで協力して作り上げることの嬉しさ、喜び、達成感、協力することの良さに気づく。

完成したカプラタワーを見た、他の子どもたちが「すごい、何これ！」と続々と集まってくる。「中を覗くと洞窟みたいだよ」「こんな大きいのもみんなで作らないと作れないよね」と作っていない者も協力して作るとこんな作品を作ることができることに気づき始める。



## 活動の姿

今まで興味を持ってこなかった子どもたちが、「俺たちも作ってみる。」と他者の作品をみて挑戦してみようと作り始める。

まだ難易度の高いものはできないけれど、似たような形になるように一個一個重ねながら積んでいく。徐々にその形に似てきてくるとカプラを見て笑顔になる。自分の作りたいたいのものが目の前に現れると自信に繋がってくるのでは。

次々と挑戦していく仲間の姿を見て、「自分もできる！」と伝えるかのように、カプラの作品とカプラケースを伸脚のように行き来して最短距離でカプラを手にしていく。素早く素早く動く姿から「みんなに追いつきたい」「みんなに認められたい」気持ちが伝わってくる。

## 振り返る

子どもが自分の経験したことを友だちに教えたいという思いから始まった今回の作品。本児は今回、協力して作ることの楽しさを知るとともに、他者にわかりやすく教えることも経験できた。仲間と作るとこんなにも大型な作品を作ることができ、また、その時の気持ちを共有する仲間がそばにいることを知ることができた。興味をなかなか持たずにいたこどもたちも、周りの園児の作品の魅力に気づき「自分も挑戦してみよう」と自ら動いてみる姿があった。保育者も子どもの習得力に気づくことができた。

## No.4 作品を紹介する

自分たちが作ってきた作品を絵本化し、作ってきた中で成長したなと感じる作品を紹介する。



### 準備した素材や道具 / 環境設定

- ◎撮ってきた写真 のり ハサミ
- 模造紙 ペン（色鉛筆）画用紙
- ◎製作コーナー

### 振り返る

前回の姿から他者に楽しさ・達成感を伝えることに嬉しさを感じているように感じ、今回の絵本作りの提案をした。そこから子ども自ら模造紙でも作りたいと意見が出たことに驚いた。模造紙、絵本作りをしていると「こんなの作ってたな～」

「これ誰作ったのすごい！僕も作ってみたい」と振り返りをしていたのでその姿に感心した。振り返る場を与えるのではなく、子どもたち自身で気づいて行える環境・きっかけを作る。



### 活動の姿

7月も後半となると、子どもたちの作品も次々とクオリティーが上がってくる。それならと、自分たちが作った作品を絵本化してみたらどうかなと思い、提案してみると「自分たちで作りたい」と賛成の声。

カプラの絵本を作ると、「開かなくてもみんなが見れるようにしたいよね」と視覚からの刺激をみんなに与えられるよう、模造紙にもカプラの紹介をしようと作業を進める。

作り終わると、みんながよく目にするところはどこか保育室を見て周り、午睡をする・みんながよく集まるはらっぱに飾ることに決定。模造紙貼りも子どもたちの手で最後まで。

## No.5 色付きカプラ 新たな発想へ

園長にプレゼントしてもらった色付きカプラで  
新たな作品づくりへと挑戦する。



### 準備した素材や道具・環境設定

◎カプラ

◎広々とした空間

### 振り返る

カプラの元の素材を楽しみながらも、色付きがあったらどうなのだろうと考えを巡らせ、さまざまな作品を園長に見せたことで今回の依頼に繋がった。色付きカプラが加わったことでカプラへの関心がさらに高まり一人で作品を作るより、誰かと協力しながら作っている姿が多く出てきた。現段階では色付きカプラを思いのまま使っているが、今後使い方にどんな変化が生まれていくのか追っていこうと思う。



### 活動の姿

色付きカプラがあったらこういうの作りたいという思いが強くなってきた子どもたち。しかし園にある色付きは少量。子どもたちで園長にお願いしに行こうと、お手紙と自分たちの魅力的な作品を見せることにした。すると、「よし、わかった」と園長が承諾してくれたのだ。子どもたちも飛んで喜んだ。

ピアノを作りたいとカプラを並び始めたAちゃんは、ピアノの黒鍵は全部ピンク、白鍵はカラフルにしようと自分の考えを巡らせオリジナルのピアノを作り上げる。

新しい色付きカプラが加わり、塔を作るのにどんな色を使おうかと二人で話し合いながら作っていた。一番上を高くしたのは、「高いビルの上には赤く光っているところがある」と航空障害灯をイメージして作ったようだ。

## No.6 新しい作品の作り方

作品を作っていく中で、色付きカプラをどのように取り入れていくの考える。



### 準備した素材や道具・環境設定

◎カプラ カプラの見本書

アイスの棒の製作写真

◎広々とした空間

### 振り返る

みんなが参考にしていた作品には色がついていなかったが、自分たちで色の付け方を考えていた。柵、屋根、窓でそれぞれ色が違い、作っている時だけではなく作り終わってからも見てると面白さ、楽しさが湧いてくるように感じた。参考になるものはカプラの本だけではなく、身近に飾られている写真やものからもヒントをもらっているのだと気づくことができた。そこであえて、いろんな国の建物の写真を用意したらどのように変化が生まれるのか見てみたい。



### 活動の姿

色付きを使っていないカプラの見本を見て、「色をつけたらどんなふうになるのだろう」と子どもたちと保育者で色の入れ方を考えながら塔を作った。これを見ると他児も場所によって色を変えるということに気づく。（※ただグラデーションにするだけではない）



アイスの棒で作った家の写真を見て、カプラでも作ってみようと思った子どもたち。柵や窓など場所によって色を変えてみたらどうかと話っていた。お菓子の家をイメージして、可愛くしたいと話合った子どもたちは、ピンク、赤、紫をメインに色をつけていく。柵の手すりの部分は、シックな色を選んでいった。理由を聞くと、「オオカミが来た時に強そうだから」という理由だった。意味も考えて色を考えていることに感心した。

## No.7 組み合わせ方

カプラとケースを組み合わせ、  
そこに加える工夫を楽しむ。



### 準備した素材や道具・環境設定

- ◎カプラ カプラのケース 廃材
- ◎広々とした空間

### 振り返る

ものづくりをする上で、材料一つだけだとレパートリーが減り、興味関心も薄れてきてしまう。そこに、新しいきっかけを投げかけることで子どもたちの想像はどんどん膨らんでいくことに気づいた。今回はカプラのケースだったが、この後から製作コーナーにある廃材に手を伸ばし、カプラの作品と組み合わせる姿も見られてきた。「こんなことができるんだよ、カプラってこんな楽しさがあるよね」など、保育者自身も子どもと一緒に楽しむことで想いを共有・共感することができた。



### 活動の姿

いつものようにカプラを楽しんでいる横に、ポツンと置いてあったカプラの空きケース。木製なのでこれもカプラとして使えないのかと、子どもたちが作っている側に置いてみる。すると、手に取ると考える間もなく、積み立ててきたカプラの横に添えて、さらに添えたケースとカプラのタワーの間に橋をかけていた。

他では、また違った使い方をしている者も。表向きのままケースの上に次々とカプラを積み重ねていき、絶妙なバランスをとりながら『凸凹の城』を作り上げていた。ケースの上にカプラを積み重ねているため、より迫力を感じられた。さらに、ケースを逆さ向きにして床との間に階段をつけてドミノを作っていた。この頃、子どもたちの間ではピタゴラスイッチが流行っていて、カプラでも自分たちの興味あることを取り入れたのではないかと感じた。

## No.8 海外の建物と照らし合わせる

カプラを通して  
色々な国の建築物を知っていく。



### 準備した素材や道具・環境設定

- ◎カプラ 海外の建物の写真
- ◎広々とした空間

### 振り返る

カプラで出来た見本の建物ではなく、実際の建物を見せることで、どんな大きさにしていこうか、カプラの重ね方はどうするか、カプラにない色はどう表現するのかなど、自分自身で考え、作り出していた。見本を真似て、作り上げる作品も嬉しいが、自分たちで考えた作品が目の前にできることにも嬉しさを感じているようだった。ここで、少しずつ子どもたちのカプラに対する熱が薄れてきているように感じる。これからどのような変化が出てくるのか、追っていきたい。



### 活動の姿

他保育者の「いろんな国の建物」という助言から、実際にある建物の写真を出してみるとどんな姿が見られるのだろうと考えた。写真をプリントアウトしてみると、早速手に取り、見立てながらカプラを積み始める。一人だけではなく数人で協力して作っていくと、かなり大きな建物ができあがる。これをもう何個か作ってみたいという気持ちが生まれたが、「これを何個も作ったらカプラがなくなってしまう」と気づいた子どもたちだった。

その会話を横で聞いていた子が「小さいのを作れば、いっぱい作れるよ」と小さめサイズで建物を作っていた。しかし、それを見た先程の子どもたちは、描いている建物とは少し違い、「それもちょっと違うんだよな～」と頭を抱えていた。ここで想像するものを共有することの難しさも感じられた。

## No.9 ダイナミックに

場所を広く使い、廃材や棚を利用しながら  
ダイナミックな作品を作る。



### 準備した素材や道具・環境設定

- ◎カプラ 廃材 棚 カプラのケース
- ◎広々とした空間

### 振り返る

製作コーナーにある廃材は、制作の時にしか使わないと思っていたので、ここで「使おう!」と思った子どもの思いに感心した。棚を使用することで、高さだけではなく、横にも広がり、カプラの遊び方の幅がどんどん広がってきたように感じた。子どもの考えは、大人には思いつかないようなことばかり。子どもの考えを知り、学びになったカプラ遊びの時間だった。 周りを気にせずにダイナミックに活動ができることにより、子どもの思いが溢れていく姿を見て、時には部屋を制限して「カプラの部屋」のようなものを作っても良いのではないかと感じた。



### 活動の姿

これまで見本書を利用し、建物や生き物を作ってきた。子どもたちもカプラの楽しさに気づき、保育者が誘いかけなくても自らカプラに取り組む姿が多く見られてきた。この日は、製作コーナーにある廃材を使用し、さらにカプラのケースで高さを出して棚と合体させて作成していた。形も不安定そうに見えるが土台をしっかり立たせ、上の方は軽くするという工夫も加えていた。

土曜保育の時間、子どもの人数が少ないこともありダイナミックなタワー作りに挑戦。普段は人に行き来があり、周りへの配慮も必要となってくる。この日は、登園人数が少ないので周りを気にせず、思いのままにカプラを積み重ねる。色の使い方も順番を決め、積み立てる人、カプラを渡す人と役割分担も考えていた。

11月～2月までの間 カプラ停滞期に突入



## No.10 少し違う形での復活

おままごとという形でカプラに誘いかけ、  
子どもたちと屋台ごっこを楽しむ。

### ✓ 準備した素材や道具・環境設定

- ◎カプラ I字型積み木
- ◎広々とした空間

### 振り返る

長い間、カプラの活動が停滞してしまった。停滞期の間にもカプラを誘いかけていたが、他の玩具に興味がいっていた。今回誘い方を変え、子どもたちが今楽しんでいることを取り入れ、興味を持てるような働きかけをした。すると、カプラでおままごとが広がっていった。のちに、他の玩具で人間役を作り、アマチュアの世界を楽しんでいた。このように、カプラで作品を作る過程を楽しむだけでなく、作り終わった作品でも楽しむ時間も大切だと感じた。



### 活動の姿

しばらくお休みしていたカプラ。これまでやってきたカプラの活動とは違い、『おままごと』という形で子どもたちに誘ってみる。すると、次々と集まってきた子どもたちだった。この日は「屋台」を想像しながら、他の玩具と組み合わせながらお店を作っていく。カプラでお店の骨組みを作り、色がついている他の玩具でジュースやチョコバナナなどを再現した。屋台が一つ出来上がると、その後ろで何やらタワーを作りはじめた。何か質問すると、「スカイツリーだよ！」と言っていた。スカイツリーの近くに屋台があるのを見たことがあるとのこと。実際に経験したことをカプラの世界で再現しようとしていたことに、現実と非現実を繋ぎ合わせる子どもの思考に面白さを感じた。

## No.11 アマチュアの街を

各コーナーでお店を開き  
アマチュアの街を作り出す。



### 準備した素材や道具・環境設定

- ◎カプラ 1字型積み木
- ◎広々とした空間

### 振り返る

先日の姿を見た保育者は、昨日やっていた子どもたちに「また新しいお店開店させよう」と誘いかけると、それを聞いていた別の子どもが「僕もやりたい」と加わった。作っていると、次第にその輪は広がっていた。そのことから、実際にやっている人を見ると、視覚からの刺激を受け興味を持ちやすいのだと感じた。また、いつもとは違うカプラの使い方、みんなで一つの作品を作ることの楽しさを伝えられたように感じる。この間までの停滞期が嘘かのようにこの日は盛り上がりを見せていた。



### 活動の姿

先日、カプラでおままごとが開かれたことから、子どもたちの間でカプラで街を作れることに気がついたようだった。この日は、広場でいつもよりも多くの子どもたちが集まり何を作ろうか話し合っていた。



1枚目は『ホテル』。みんなが遊びすぎて疲れたらここで休憩できるようにという意味があった。2枚目は『筋トレ会場（ジム）』。サーカスのテントみたいになっている。3枚目は『レストラン』。その他にも『プール』や『レストランに行く近道』『お花屋さん』などたくさんつくられていった。気づけば、はらっぱ（広々使える場所）では、一つの大きなアマチュアの街が広がっていた。

# カプラの探究活動を通して

## 問いを考える

作品を作っていく中で、保育者と一緒に楽しむことを忘れなかった。子どもの考えに問いかけたり、保育者の考えに子どもが質問するなど、互いに考えを共有し、学び合いに繋がった。

## 環境をデザインする

子どもたちの作品を毎度写真に残していくことで、そこから「作品紹介」の模造紙や「カプらの本」を作ることができた。また、棚などを動かし広々とできる環境を作った。さらに、カプらを保育室に常時置くことでいつでも探究できるようにした。

## 探究活動を実践し記録する

子どもたちのやりたいと一緒に叶えることを意識したが、手を貸しすぎてしまう場面も多々あった。一緒に楽しむことと子どもの力量に合わせた援助のバランスに難しさを感じた。

## 振り返り共有する

保育記録（ブログ）に記載したり、午睡中のミーティングで他保育者からの助言をいただくことがあった。

探究活動を始める前は、夕方保育のちょっとした時間に遊んでいたカプら。夕方保育の際に毎日出していくと「またカプらか...」とマイナスの意見も出ていた。そこで常に保育室に置き、いつでも誰でも好きな時にできるようにしていくと、カプらに興味を持って取り組み始める子どもが増えてきた。『カプらマスター』といって自分の個性を活かした作品を作る者、カプらの扱いが上手いものに贈られるマスターカードに憧れを持つようにもなった。さまざまな活動を通し、子どもたちのカプらへの想像力、造像力はさらに豊かになったように感じた。正解不正解も終わりもない探究活動。子どもたちの探究心は年齢と経験と共に成長していくのだと実感した。

**ご清聴ありがとうございました。**  
**Thank you for your attention.**